

錦絵版画で見る「江戸東京の風物詩」 2017年9月2日(土)～9月27日(水)

ここで展示紹介する「江戸名所之絵」は、大江戸の市中全体を眺めた俯瞰図で、現代の東京新名所・東京スカイツリー®のそびえ立つ地と同じ位置からの作品です。

また、歌川広重の名作「名所江戸百景」の中から江戸期に水運で栄えた面影ある水辺の作品と大正・昭和にかけて活躍した新版画絵師、小原祥屯と川瀬巴水の写実的描写の作品です。お楽しみください。

大江戸一覧と初春の景色

大江戸の景色一覧～江戸名所之絵～

今から200年ほど前の東京は《大江戸》と呼ばれた豊かな世であった。この「江戸名所之絵」は、現代の東京新名所・東京スカイツリー®のそびえ立つ地、向島業平辺りから眺めたような俯瞰図である。このように大江戸の景色を一目で見えるような感覚で描いた都市図は、「江戸一目図」「江戸鳥瞰図」などとも呼ばれた。絵師は鍛形蕙斎紹真といい、元は浮世絵師で北尾政美と号したが、寛政6年(1794)に美作国津山藩松平家の御用絵師に登用された珍しい経歴をもつ。ここでは蕙斎が文化6年(1809)に描いた肉筆画「江戸一目図屏風」の原図である版画「江戸名所之絵」を拡大複製した。書き込まれた《大江戸》の詳細な地名は270もある。そのうち約半分を漢字化した参考図を脇に添えたので、この豊富な《大江戸》の都市情報を現代と比べてご堪能いただければ幸いです。

鍛形蕙斎紹真画「江戸名所之絵(江戸鳥瞰図)」大判錦絵一枚

享和3年(1803)野代柳湖刻 鍛形氏蔵版
東京都江戸東京博物館所蔵



名所江戸百景

葺輪金杉三河しま (複製版画)

歌川広重 / 画

安政4年(1857)5月 魚屋栄吉 / 版 大判錦絵

三河島(現在の荒川区)の湿地には、毎年冬に鶴が飛来することで知られていました。そのため、徳川將軍家の鷹狩を行う御鷹場と、鷹狩用の鶴の飼付け場が設けられていました。広重は上空から舞い降りるタンチョウ(丹頂)を大胆に、また、鶴の餌の米を撒き与えている人物をじっと見つめるもう一羽の鶴をユーモラスに描き出しています。

名所江戸百景

深川洲崎十万坪 (複製版画)

歌川広重 / 画

安政4年(1857)5月 魚屋栄吉 / 版 大判錦絵

一面に荒涼とした雪景色が広がり、遠くには筑波山が見えています。大きく翼を広げた鷺が天を覆うように配置された大胆な構図の作品です。この鷺の描写には、背中に雲母摺、爪に膠摺と、手の込んだ技法が用いられています。洲崎(現在の江東区東陽)は、鷺の飛来地として知られていました。



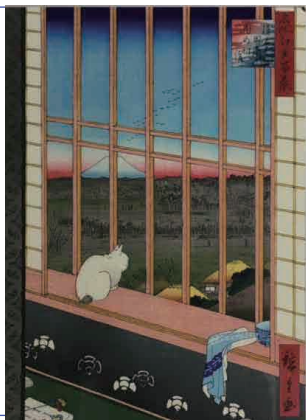
名所江戸百景

浅草田甫西の町詣 (複製版画)

歌川広重 / 画

安政4年(1857)11月 魚屋栄吉 / 版 大判錦絵

吉原の遊郭で飼われていた猫と、遊郭の窓越しに西の市詣の人々を描いています。浅草の鷺神社は、毎年十一月の西の日に商売繁盛祈願の人々で賑わいます。西の市といえば熊手が名物ですが、この作品では、畳の上に遊女のものと思われる熊手の形のかんざしがさりげなく置かれています。





名所江戸百景 大はしあたけの夕立

1857年(安政4)

うたがわ ひろしげ
歌川広重

「名所江戸百景」は、抒情的な作風の風景画に実力を発揮した歌川広重(1797~1858)晩年の集大成。本図では、急な夕立に慌てふためく人びとを斬新な構図で捉えている。浜町河岸と深川地域を結ぶ新大橋は、元禄年間の架橋。一帯は、画面奥の御船蔵にあった安宅丸に因んだ名で知られた。鉄橋となって場所を上流に移した1912年(明治45)ころより、地域の開発から、周囲の風景は江戸の面影を失った。

永代橋

1937年(昭和12)

かわせ はすい
川瀬巴水

元禄年間に架けられた永代橋は、鉄橋となった1897年(明治30)に、これまでよりも下流の日本橋区新川と深川区永代の間に場所を移した。現在の橋は1926年(大正15)、関東大震災後の復興事業で架橋されたもので、雄大さを意図したデザインは「帝都の門」と呼ばれた。本図は、こうした新時代の感覚に、江戸の名残を伝える隅田川の風景を取り入れた作品である。



日本橋(夜明)

初摺 1941年(昭和15)

かわせ はすい
川瀬巴水

明治44年(1911)に石橋へと改架された日本橋。この石造橋は、関東大震災(1923年)や東京大空襲(1945年)で被災しながらも100年にわたり存続し、ルネッサンス様式の優美な姿を見せてくれる。大正新版画の担い手川瀬巴水(1883~1957)の作品。(後摺り版)

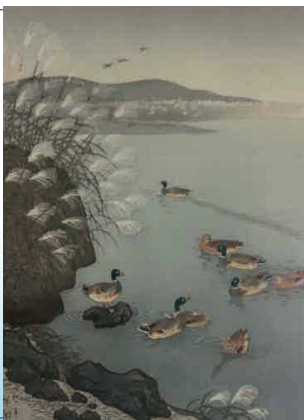
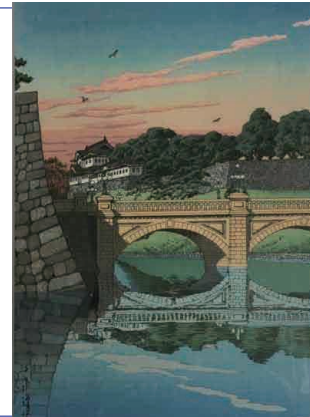
二重橋の朝

1930年(昭和5)

かわせ はすい
川瀬巴水

旧江戸城西の丸に架かる二重橋は、1888年(明治21)に鉄橋となった。もとは西の丸下乗橋の名を持ち、橋桁が上下二段の構造になっていることから二重橋と呼ばれた。東京へ来た観光客が訪れる場所として、今日も広く知られている。

朝焼けの空と、水辺の対比を情緒的に描いた作者の川瀬巴水(1883~1957)は、東京や日本各地の風景版画を大正から昭和にかけて約600点制作し、「昭和の広重」とも呼ばれた。



晩秋の池

1931年(昭和6)

おはらしょうせん
小原祥邨

小原祥邨(1877~1945)は、小原古邨(こはらふるむら)の名前で、1905年(明治38)より花鳥画の木版画家として知られていた。金沢に生まれ、日本画家として活躍していたが、来日中のお雇い外国人、アーネスト・フェノロサに木版画を制作するよう勧められたという。池の畔の鴨の群れを描いた本作品は、爽やかな秋の情景を伝えている。